# 猪道

工藤義夫句集

梅里書房

# 句集・錨泊（びょうはく）

発行・一九九六年八月二十五日
定価・二八〇〇円（本体二七一八円・税八二円）
著者・工藤義夫
発行者・山田浩路
発行所・株式会社梅里書房
東京都杉並区梅里一丁目十五番十三—一〇一号
電話〇三・三三一三・六四三一（代）〒一六六
印刷・三和印刷株式会社
長野市川中島町一八二二番一〒三八一—二二

乱丁・落丁はお取り替えいたします。

© Yoshio Kudoh, Printed in Japan

製本・松栄堂製本所
ISBN4-87227-134-3

# 序

水原　春郎

工藤さんは十五歳の時海上自衛隊に入られ、爾来定年退官まで海上自衛官として勤務された生粋の海の益荒男である。

此の度上梓される処女句集名を『錨泊』と決められ、各章の題名も「船笛・黒潮・舷窓・飛魚・海霧・潮騒・海光」と海に因む言葉で統一されていることは、誠にうべなるかなである。

彼の俳歴を伺うと、中学時代に担任の先生の影響で詩・短歌に興味を持ち作り

始め、二十代後半から正式に短歌を学ばれたということである。余りにも秋櫻子に似た経歴に驚かされた。昭和四十八年に俳句をはじめられ、「馬酔木」に翌四十九年八月号から投句された。以来今日まで無欠詠という精進振りである。昭和六十三年「馬酔木」同人に推挙され、研鑽を積まれると共に新人の指導にも力を注がれている。

私と彼との交流は馬酔木若手研究会が出来てから密となったが、研究会における指導振りは、厳格な面はあるが決して自分の考えを押し付けるのではなく、個人個人の良い芽を育てようと努力されているのには感心させられる。

句稿を拝見して感じたことは、奇を衒うことなく、あくまでも正攻法でつらぬいた句であるということである。その上、海の句に片寄らずに身辺にも広く眼を向けられていることであろう。

此の度、人生の一つの区切としてこの句集を編まれた意義は大きく、一人でも多くの方々に読んで頂きたい。感銘を受けられることを信じて疑わない。私は彼の句の中で海上勤務時代の句に心惹かれるものが多いのは、私が学生時代に海軍に籍を置いたということかも知れない。彼の好みの色は紺、季節は秋、花は桜だ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そうだ。彼らしいではないか。

私の好きな句十句を記す。少しでも多くの句を紹介したいので、帯に千代田葛彦氏が挙げられる句は避けた。

舷門に除夜の船笛聞きゐたり

時雨るるや海図の上の六分儀

月さして二百十日の羅針盤

飛魚や帰航これより追潮に

錨打つ朧のふかさはかりつつ

油凪海底火山帯を航く

方位盤薫風父母をはるかにす

海光や春の雪積む方位盤

木枯やドックの底に船坐り

退官の帽子秋澄む日に脱ぎぬ

終りに彼が健康で、限りない前進をされることを希う。

平成八年四月

句集錨泊◆目次


序　水原　春郎　1

船笛　昭和四十九年～五十一年　9

黒潮　昭和五十二年～五十三年　27

舷窓　昭和五十四年～五十八年　51

飛魚　昭和五十九年～六十二年　85

海霧　昭和六十三年～平成三年　119

潮騒　平成四年～五年　149

海光　平成六年～七年　167

跋　渡邊千枝子　189

あとがき　199

題簽・千代田葛彦

句集

# 錨泊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

# 船笛

昭和四十九年

朽舟に春の水嵩増しにけり

船に旗振りて五月の療養所

巌頭に鶚胸張る雲の峰

海涼し月光を漕ぐ漁舟

昭和五十年

浦の舟焼ける真上を帰る鴨

春の雪薬屋の傘借り戻る

買物の妻待つベンチあたたかし

蔵二階雨の泰山木にほふ

顔洗ふ音の大きく今朝の秋



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com